

大学入試英語問題の検討

梶 木 隆 一

1. 現在までの経過

現行の大学入試制度にはいろいろな問題点があり、かなり以前からその改革を求める声が高くなっている。ことに学力検査の方法や内容は高等学校の教育にも重大な影響を及ぼすので、できる限り適正なものに改善する必要がある。英語の入試問題は大学側の自主的判断と社会の要請によって次第に良い方向に進んでいるけれども、全般的に見ればまだ満足すべき状態とは言えない。

JACET は創立以来大学の英語教育全般について研究討議を重ねてきたが、その一環として入試改善を一つの目標として掲げている。毎年の大会においても直接または間接にこの問題に触れてきたが、とくに1969年の秋に testing の世界的権威として知られている Dr. John B. Carroll を招いて特別セミナーを開催し、大学教官ばかりでなく中高の英語教官や心理学者などが参加して討議した。その結果、一同の総意をまとめて「大学入試改善の基本的見解」を発表した。その内容は要約すれば次のとおりである。

A 将来の改善策

1. 中高大の一貫した英語教育をめざして、中高側の意見を斟酌して入試を改善する。
2. 高校の調査書を重視する。
3. 外国語学習の適性を測定する方法を加えて、入試後の教育に資する。

B 現在の実態に即した改善策

1. reading については内容理解力を測定できる種々の設問形式を工夫し、速読テストを加える。
2. writing については和文英訳にかたよらずに英文の基礎的構成能力を測定する出題を工夫する。
3. hearing test の実施に努力し、speaking は口頭で直接に発表させる方法を考える。
4. 入試全般について次の点に留意する。
 - (a) 基礎的学力をテストする問題とする。

- (b) 出典は現代英語に限る。
- (c) 語いについては高校の英語教育に過度な負担がかからないように配慮する。
- (d) 主観テストの採点基準を厳格に規定し、客観テストとの適正な割合について配慮する。
- (e) 解答例の公表に努力する。

JACET は以上の趣旨を広く関係方面に訴えると同時に、具体的な研究討議を続けてきた。

毎年の入試問題については、文部省大学学術局から「大学入学者選抜試験問題作成の参考資料」が各大学に配布されている。また高校側からは全国高等学校長協会が「大学入試問題所見集」を公表している。いずれもその年度の問題の中から適当なもの及び不適当なものを選び出して、大学側の反省と考慮を求めているが、全般的な批判検討を十分につくしたものではない。そこで JACET では入試問題検討委員会を作って、先に発表した基本的見解に準拠して批判を加えることにした。委員会のメンバーはすべて大学の英語の教官であり、実際の出題に関係している者も含まれているので、その討議は自己批判または相互批判になる場合が少なくない。しかし委員一同は大学教官としてではなく、英語教育者としての観点に立って、できるだけ主観的な判断を抑えるように努力した。

その結果、1971 年にその年度の問題を批判検討して、小冊子の形にまとめて刊行した。その中の疑問点の解明について、日本滞在中の教養あるアメリカ婦人 27 名の協力を得た。また第 5 回 JACET 夏期セミナーの講師として来日したハワイ大学の Dr. Kleinjans および Dr. Lester の意見を徴することもできた。しかし、全国各大学から出題された問題はかなりの量に上るので、紙数の制限や時間的制約のために徹底した検討ができなかったことは認めなければならない。それにもかかわらず、刊行の結果として多少の反響があり、検討を続けるようにという要望もあったので、1972 年にも同様の検討集を発表した。その際にも前回と同じように大学卒業のアメリカ婦人の援助を得ることができた。

この種の調査は 1 回や 2 回ではあまり意味がないので、少くとも何年か続けて比較してみる必要がある。そこで今年度も同様の作業を進めていたが、諸般の事情から今年は検討集の刊行を断念しなければならなくなった。その代わりとして、調査検討の要点をここに掲げることにする。なお委員会のメンバーは年によって多少の移動があるが、今年度は梶木隆一、楠瀬淳三、中村敬、高木

道信, 中村功, 森戸由久, 松山正男, 田島穆, 若林俊輔, 国吉丈夫, 阿部達の 11 名である。

2. 1973 年度問題の検討

(1) 読解力に関する問題

(a) 語 い

読解力テストの材料として用いられる英文中の単語の程度がまず問題になる。全般的に言えば, その点については出題者がかなり配慮している跡が見られ, 極端にむずかしい単語は比較的に少ないようである。また難解と思われる語には注がついている場合も多い。しかし, 高校卒業程度という基準に照してみると, まだ一般の受験生には難語と思われるものが散見される。たとえば, 注をつけてあるものを除いて, at random に 50 語を拾い出すと次のような語が見られる。

aborigines 青山学院大 (経)
allocation 埼玉大
beseech 同志社大 (文)
choppy 神戸商大
denomination 慶大 (経)
domineering 東大
extentionality 京都女大
hierarchy 名工大
indoctrinate 千葉工大
infallibility 金沢大
intact 明大 (商)
irrelevant 横浜市大 (商)
makeshift 拓大 (商)
mediate お茶水女大
orthography 小樽商大
outstrip 青山学院大 (文)
prerequisite 岡山大
retrospective 新潟大
sizable 埼玉大
supernal 独協大 (外)
synagogue 慶大 (経)
tasselled 東京女子大 (文)
theocracy 大阪経済大
unfurl 神戸商大
upstart 宮崎大

allege 日大 (理)
anachronistic 大阪外大
charabanc 大阪女大
congregational 関西大 (経)
deterioration 早大 (法)
exorbitant 上智大 (外)
harass 九大
impregnate 関西大 (経)
ineradicable 大阪経済大
inimitable 弘前大
irrefutably 上智大 (理工)
irreplaceable 千葉大
maladjustment 奈良女大
obnoxious 上智大 (理工)
outlandish 学習院大 (法)
pantomimic 中央大 (法)
quarrelsomeness 関西学院大 (経)
sissy 大阪府大
smattering 一橋大
supersede お茶水女大
taciturn 鶴見 (文)
teleprinter 徳島大
undermine 都立大 (人文・法・経)
unhampered 和歌山大
veneration 都立大 (理工)

以上の中には和訳を求めている部分に出ているものがある。何が難語であるかという判断は人によっても違うし, それが使われている英文の内容や前後の

関係によって左右されるだろう。上に挙げた単語でも、ある大学では平気でそのまま出題し、別の大学では注をつけているものもある。現行の高校の教科書に全然出ていないからといって一概に難語ときめつけることもできない。したがって、上の例がすべて不適当だと判断するのは早計である。単語そのものはむずかしくても、前後を読めば容易にその意味がわかる場合も少なくない。また文脈によって未知の語でも判断できる能力も読解力にとって重要だという見解も否定できないであろう。

しかし、高校卒業生に求められているおよそ 5,000 語の程度をはるかに越えるようなものは除くべきであろう。入試問題に依然として高度の単語が出題されるならば、受験生は教科書の学習だけで満足できないで、いわゆる受験用語いをむやみに棒暗記しようとする弊害を助長し、正規の英語教育を乱す結果になる。いたずらに多くの単語を覚えようとしても真の学力は伸びるものではない。基本的な語いについて、多くの意味や用法に習熟することが進学後の学習にとっても効果的である点から言っても、大学側は問題中の語いに関してもっと慎重な考慮を払うべきである。

(b) 英文和訳

読解力を判定する問題の中で、和訳の形式は古くから用いられているが、内容と表現が適当なものでさえあれば、かなり確実に学力を検出できるはずである。しかし、全文和訳を出題している大学は例年のように少数で、おもな大学について見るとその 1 割くらいに過ぎない。また英文の長さも 100 語を越えるものは少ない。

It is said that the young are naturally impatient, and struggle to improve their lot: whereas the old have learnt the lesson of patience and submission. This is perhaps true as a statement of fact. But in neither case does it point, I think, to an ideal philosophy of life. Neither impatience, nor patience, are good in themselves. To be good, they have need of each other: each has to supply what is defective in the other. Just as the old have need of the energy of youth, so the young have need of the experience of old age. What we all need, young and old alike, is a union of fiery impatience and snowy patience.

(京都府医大)

上例は全文和訳としては長いほうであるが、まとまった見解を述べている。内容も常識的であり、表現も平易で単語や構文の点で難解なところはない。和訳問題としては標準に近いものと言えるだろう。ただし、採点はかなり主観に左右されるので、訳語の許容範囲をはっきり決めて、訳文の巧拙よりも全文の理解の程度に重点をおくべきであろう。

Mr. and Mrs. Craig came up to the door of Miss Gray's house and rang the bell. The maid showed them in. They shook hands with Miss Gray, and because I was standing near, she introduced me to them. Then she turned to the judge.

"And this is Sir Edward Landon, Mr. and Mrs. Craig."

One would have expected the judge to move forward with an outstretched hand, but he remained stock-still. He put his eyeglass to his eye, that eyeglass that I had on more than one occasion seen him use with devastating effect in court, and stared at the newcomers.

He let the glass drop from his eyes. "How do you do," he said. "Am I mistaken in thinking that we've met before?"

(種智院大)

これも全文和訳としては長いが、いろいろな人物が出て来て少しわかりにくい。しかも前半と最後の部分はきわめて平易な英文で、とくに和訳を求める必要はなさそうに思われる。それに反して、中段の部分はかなり程度が高くて訳しにくい。和訳の問題としては疑問が残るであろう。

大多数の大学は独立した形または総合的問題の 1 部として部分和訳を出題している。今年度について見ると、部分和訳は全文和訳の 4 倍以上に達している。長い英文を出題するとき、全体の和訳を求める必要はなく、また採点上の便宜から考えても、それは当然の傾向と言える。しかし、下線部の和訳を求める場合には、全文またはその前後の部分が理解を助けるようなものであることが望ましい。下線部以外を読まなくても訳せるような問題は部分訳としての意味が少ないことになる。実際にはその点を深く考慮しないで、少しむずかしそうな部分だけの訳を求めるような出題が多いようである。

ROGER SHERINGHAM was inclined to think afterwards that the Poisoned Chocolate Case, as the papers called it, was perhaps the most perfectly planned murder he had ever encountered. The motive was so obvious, when you knew where to look for it—but you didn't; the method was so significant, when you had grasped its real essentials—but you didn't; the traces were so thinly covered, when you had realized what was covering them—but you didn't realize. But for a piece of the merest bad luck, which the murderer could not possibly have foreseen, the crime must have been added to the classical list of great mysteries.

(慶大一医)

これは巧妙に計画された殺人事件について述べているが、全文をよく読まないで下線部の意味を明確につかめないだろう。前後の部分が解答を出す上に役だっているので、部分訳としての意味があると言える。

Owing to our isolated life none of us knows very much about human nature. In former times it was impossible for human beings to live such isolated lives as they live today. We have from the earliest days of our childhood few connections with humanity. The family isolates us. Our whole way of living forbids that necessary intimate contact with our fellow men, which is essential for the development of the science and art of knowing human nature. Since we do not find sufficient contact with our fellow men, we become their enemies. Our behavior towards them is often mistaken, and our judgments frequently false, simply because we do not adequately understand human nature. It is an often repeated truth that human beings walk past, talk past, each other, fail to make contacts, because they approach each other as strangers, not only in society, but also in the very narrow circle of the family. There is no more frequent complaint than the complaint of parents that they cannot understand their children, and that of children that they are misunderstood by their parents.

(横浜市大一理・医)

これは最後の一文だけを訳させる問題である。人間が孤立して接触が少なくなっているという前段の説明は確かに理解の助けにはなる。しかし、前の部分を読まなくても訳出に困ることはない。この部分だけを出題してもさしつかえないはずで、わざわざ長い前段を読ませる必然性はなさそうに思われる。この全文を出すからには何かほかの設問形式を考えるほうが適当であろう。

(c) 要旨の問題

全文の要旨を 50 字から 100 字程度の日本語で書かせる問題は昨年も一昨年もかなり出されたが、今年度は目だって減少した。単なる和訳では本当に理解しているかどうか判定しにくい場合もあるので、要旨を求めるほうが読解力テストに適している点がある。しかし、この種の問題は解答が千差万別になり、採点の客観的基準を立てるのがむずかしいという欠点がある。今年度は客観テストの傾向が一段と強くなったので、要旨を求める出題が少なくなったものと思われる。主要なポイントがいくつもあったり不明確であるような内容では困るが、だれが読んでも要点を簡潔にまとめられるような内容のものを選べば、出題の価値があるはずである。

次の文の要旨を 100 字以内で書け。ただし句読点も字数にかぞえること。

Languages do not exist in a vacuum but are powerfully affected by social, political, economic, religious and technical change. If a great many more people are studying Russian today than was the case only twenty years ago this is not due solely to the intrinsic merits of that very interesting language but to the dramatic rise in status and power of the Soviet Union. The similar tremendous increase in political, military

and economic strength of the United States, coupled with the relative decline of Great Britain and the Commonwealth, has inevitably led to heightened prestige for the American way of doing things, and since it so happens that most of the world's films are made by Americans there exists in the cinema a perfect channel for the passage of Americanisms into the English of Great Britain, though of course industry, advertising and the press also play their part in this respect, while television is so prodigal of material that the B.B.C. is obliged to make use of a great amount of American film. This vigorous stream of Americanisms must inevitably make some impression on the language of Britain, the more so as transatlantic standards of comfort and success are on the increase there.

Note: intrinsic=belonging naturally; existing within, not coming from outside.

B.B.C.=British Broadcasting Corporation.

(東京水産大)

要旨問題としては典型的なもので、内容も表現も比較的に平易である。また要点もしぼりやすいので、出題の意味は十分に認められる。ただし、100字以内という漠然とした指定では解答者が迷うので、最低と最高の字数でも示して幅をもたせるほうが親切であろう。

次の英文を読み、学校教育の役割を二つあげて、それぞれ40字以内の日本語で説明せよ。ただし、句読点は1字とする。

Sometimes one sees in the school simply the instrument for transferring a certain maximum quantity of knowledge to the growing generation. But that is not right. Knowledge is dead; the school, however, serves the living. It should develop in the young individuals those qualities and capabilities which are of value for the welfare of the commonwealth. But that does not mean that individuality should be destroyed and the individual become a mere tool of the community, like a bee or an ant. For a community of standardized individuals without personal originality and personal aims would be a poor community without possibilities for development. On the contrary, the aim must be the training of independently acting and thinking individuals, who, however, see in the service of the community their highest life problem. As far as I can judge, the English school system comes nearest to the realization of this ideal.

(愛媛大)

この問題のように、最初から二つの要点を掲げて具体的な指示を与えれば、それだけ解答を出しやすいわけで、採点基準もかなり明確になる。単に全文の要旨を求めるよりも一步前進した出題と言えるだろう。

(d) 選択問題・完成問題

読解力テストの1種として各種の選択問題や完成問題が昨年より少し増加している。その大部分は客観テストの形式によるもので、多くの大学が出題にかなり苦心している跡がうかがえる。その中で、まとまった1節の英文のあとにその内容に関する短文をいくつか示して、○×によって真偽を判定させるような形式がよく用いられている。その場合に、本文を読まなくても常識で解答がわかってしまうような出題は避けるべきであろう。なお選択問題で選択枝が少ないと、でたらめな解答が当たる確率が高くなるので、少なくとも四つくらいの選択枝を設けることが望ましい。

次の英文を読んで、1-10の設問に対して与えられた答（日本語）の中から、それぞれ最も適当なものを選び、その記号を解答欄に記入しなさい。

The sky was coming pale blue over the river, and pale gold edges of light began to show around the far mountain rims. The house looked like a lovely toy in the defining light, edges gilded, its shadows dancing.

“Luis.”

“What?”

“I have an idea.”

“Well?”

“Did you feel cold all night?”

“No, but you would not lie still.”

“I am sorry. I heard Josefina talking to Mama.”

“The poor old woman.”

“Do you realize that we are so poor that we haven’t got enough things to keep us warm, especially with the new baby here? And an extra woman in the house? . . . She ought to stay with us until Mama is well again.”

“What are you going to do about it?”

“You and I should take the musket and go to hunt cats in the mountains, and bring home enough furs to satisfy everybody.”

“Yes,” said Luis, without any surprise, “I have thought of that too.”

“Then I can go?”

“I suppose so—if you behave yourself. It’s no child’s errand, you know.”

“Of course not. Then will you tell Mama?”

“All right.”

Now the smoke was thick and sweet above the house.

The light spread grandly over the whole valley.

Luis went to his mother’s bedside and leaned down. The baby was awake and obscurely busy against her mother’s side.

“Mama.”

“My little Luis.”

“Julio and I are going to the mountains for a few days, to get some

furs."

"No, no, you are both too young! That little Julio is just a baby. Now, Luis, don't break my heart with any more troubles!"

"What troubles? We have no troubles!"

"Your father is gone, we have no money, my children shiver all night long, that Josefina is . . . Father Antonio hasn't been near us since the baby was born."

She wept easily and weakly. Luis was full of guilt and ideas of flight. He leaned and kissed her cool forehead and laughed like a big man.

"You'll see. My brother and I will come back like merchant princes."

"Then you are going?"

"Yes, Mummie, we'll go."

She stared at him in a religious indignation. This was her son! So even sons grew up and went away and did what they wanted to do, in spite of all the things women could think of to keep them back!

Later Julio came to say good-by, and she shamelessly wooed him to stay, with the name of God, and her love, and his pure dearness, and various coquetries. He felt a lump in his throat, so he shrugged, like his father, and went to the other room, where he paused and said, "Thank you, Josefina, for staying until my brother and I get back."

They had two horses and the musket which their father had left at home upon his last departure for Mexico. They had a rawhide pouch containing things to eat, loaves and chilies and dried meat. As soon as they were free of the little fields of home, Julio began to gallop; and Luis overtook him and, saying nothing, reached out for the halter and brought him down to a walk. Julio felt very much rebuked; he sat erect on his horse and squinted his eyes at the mountain rising so far ahead of them, and thought of himself as a relentless hunter.

The boys toiled over the land all morning.

They paused and looked back several times, touched by the change in the look of their farm, which lay now like a box or two on the floor of the valley; and they thought respectively, "When I have my farm, I shall want to be on higher ground," and "What if something dreadful has happened since we left home! If the baby choked to death, or a robber came, I should never forgive myself."

The mountains looked strangely smaller as they advanced. The foothills raised the riders up, and from various slopes the mountain crowns seemed to lean back and diminish. The blue air in canyons and on the far faces of rock slides and broken mighty shoulders was like a breath mystery over the familiar facts of memory.

"Let me carry the musket now for a while."

"No, we might as well decide that now. I am to have it all the time."

"Why, that isn't right!"

"No, I have had more experience with it. It is our only arm. Now

be sensible.”

“Just because I am the younger, you always do this way. I tell you, I am an excellent shot.”

“You may be. But I am nearly four years older, and I just think it better this way.”

“I wish I’d known before we started.”

“Why don’t you go back, then?”

“I will.”

But they rode on together. Easily triumphant, Luis could afford to be indulgent; later on he rode close to Julio and knocked him on the back and winked.

“You think I am not as much of a man as you are,” said Julio bitterly.

“Well, you’re not.”

“You’ll see! I can show you!”

The brothers’ love for each other was equally warm, but derived from different wells of feeling. Sometimes they felt only the love; at other times, only the difference.

Now in the afternoon, riding on the windy November plain, and knowing that before nightfall they would be in the very shadow of the nearest mountain reach, they felt their littleness on that world. The air was lighter so high up above the river valley. They looked back: an empire of sand-colored earth, and there, in the far light, the river herself, furred with trees. They looked ahead, but in doing that had to look up.

It was a crazy giant land; a rock that looked like a pebble from here was higher than a tree when they got to it.

“We must find a place to leave the horses.”

“What?”

“You idiot, we can’t expect horses to climb straight up cliffs like that over there!”

“Sure, we’ll find a place to leave them.”

“It must be nearly too late to go into the mountains tonight.”

“We’ll make a fire here.”

“If it is clear enough tonight, they could see our fire from home.”

“They could?”

The thought made Julio shiver. But then it was already getting chill. The sun was going down.

1. Why did Julio and Luis leave their house and go to the mountains?
What was their purpose?

A. 登山	B. 狩猟	C. 薬草採り	D. 採石	E. 父親探し
-------	-------	---------	-------	---------

2. Who was left at home?

- A. 父親と母親 B. 母親と神父 C. 手伝いの女と赤ちゃん D. 赤ちゃんと母親と神父 E. 赤ちゃんと母親と手伝いの女

3. Why was their mother in bed?

- A. 老衰 B. 眼病 C. 産後 D. 心臓病 E. 不明

4. On what kind of place did their house stand?

- A. 盆地 B. 丘の上 C. 山腹 D. 高原 E. 溪谷

5. When their mother learned that her sons were going to the mountains, what did she feel?

- A. 恐怖 B. 悲嘆 C. 期待 D. 喜び E. 無関心

6. How did they go most of the way?

- A. 兄も弟も馬をひいて歩き
B. 兄も弟も馬に乗り並み足から早駆けに移って
C. 兄も弟も馬に乗り早駆けから並み足に移って
D. 弟は馬をひいて駆け足で、兄は馬に乗って
E. 兄は馬をひいて歩き、弟はその馬に乗って

7. How many guns did they carry?

- A. 0 B. 不明 C. 3 D. 2 E. 1

8. How long did it take for them to reach the place where they first set up a camp?

- A. 2~3 時間 B. 朝から昼まで C. 昼から夕方まで D. 朝から夕方まで
E. 1 日半

9. What was the weather like?

- A. 晴 B. 曇 C. 雨 D. 雪 E. 暴風

10. How did the two boys feel toward each other?

- A. 憎しみ B. 無関心 C. 尊敬 D. 親愛 E. 軽べつ

(千葉大)

この問題は 1,000 語を越える長文であるが、全体としては平易な表現である。中には *chilies* のような特殊な語も出ているけれども、それを抜かして読んでもさしつかえあるまい。選択枝も多く、しかも本文をよく読まなければ正解を得ることはできない。やさしい英文を限られた時間内で読んで理解することも

意味があるので、rapid reading を奨励する点から見れば適当な部類に属するであろう。

We are used to [1] music that was not written in our time. Beethoven worked about a century and a half (6) and Bach a good seventy-five years (7) that. But it is possible [2] music of the year 800 and to find out what people thought about it then. Imagine how much music must have been written between 800 and 1600, a period more than three times as long as that from Bach [10] our own day.

Music historians use "Middle Ages" as a convenient name for the fifth to fifteenth centuries. The century and a half after 1450, a time when composers had many new ideas, we call the Renaissance. The Renaissance in other arts began about a hundred years (8). We can point to great differences [11] the music of the Middle Ages and the Renaissance, but there are changes every bit as interesting in medieval music. Life in 800 was not the same [12] life in 1200 or 1400.

When do most people pay so little attention [13] music written (9) 1700 although they are happy [3] to Bach? One reason is that the older music can seem strange to us, partly because we haven't had much chance [4] it until recently. Now that you can [5] to medieval and Renaissance music on records, it can become as good a friend [14] any piece by Mozart.

A. 次の語群のうち、もっとも適当なものを一つ選び、空欄[]に入れなさい。同じ語を2回以上使ってもよい。

- | | | |
|-----------|--------------|--------------|
| a. hear | b. to hear | c. hearing |
| d. listen | e. to listen | f. listening |

B. 次の語群のうち、もっとも適当なものを一つ選び、空欄()に入れなさい。同じ語を2回以上使ってもよい。

- | | | | |
|--------|-----------|------------|-----------|
| a. ago | b. before | c. earlier | d. sooner |
|--------|-----------|------------|-----------|

C. 空欄[]に適当な語を一つずつ入れなさい。

これは選択形式と完成形式を組み合わせたもので、内容全体の理解よりもむしろ構文や語法の知識が主になっている。とくに難解な点は見当たらない出題である。

なお大部分の大学では、総合問題の一部として和訳を求めたり種々の設問によって読解力を検出する方法を採用している。一つの材料をいろいろな面から問題にすることは、なるべく多角的に学力を判定する見地からすれば好ましい傾向と言えるだろう。しかし、ただ点数を与えるに過ぎないような幼稚な設問や、逆に何を求めているのか明確でないようなひねくれた設問は避けるべきである。あくまでも基礎的な学力を正確につかめるような設問に重点をおいて出題する配慮と工夫を望みたい。

(2) 作文力に関する問題

(a) 和文英訳

作文力問題の主流となっているものは依然として和文英訳の形式である。読解力に比べて作文力が一般に劣っている今日では、簡単な英作文でも学力差がはっきり現われることは確かである。しかし、差をつけるのに便利であるという一種の便宜主義から、受験生の学力や解答の難易を深く考えずに出題するようでは困る。記述式の和文英訳は表現力を検出する良い方法であることはだれでも認めるけれども、日本文の内容や表現がはたして適当であるかどうかを慎重に検討する必要がある。あくまでも英語の表現力をテストするのが目標であるから、問題の日本語の理解に難点があるような場合は適当とは言えない。今年度の出題には、日本文の表現がむずかしくて訳に迷うようなものが見当たらないのは結構である。基礎的な短文をいくつか出題している大学もあり、またかなり高い表現力を要する長文を問題にしている大学もある。

大統領は、自分も苦学して大学を出たりした関係か、力のない、なにも訴えることのできない人たちのために働くということを、政治の目標としてかかっていた。

(東大)

パリでは中心部の建築のほとんどが、日本ならばさっさとこわして建てなおすような古いものだが、多少の不便はしのんでも大切に保存している。パリ人は美しいと信じている市街構造の調和をくずしてはならないと、互いにまもりあっているのである。

(大阪外大)

上の2例は日本文には別にわかりにくい点がなく、ある程度の表現力があればなんとか訳せるはずである。しかし、出題者が満足できるような解答を書ける者は高校卒業生の中には多くいないと思われる。したがって、無理な出題とは言えないが、どの程度の解答を求めるかという点が問題になるだろう。

名作と言われるものは、年若い頃に、できるだけ多く読んでおくがよい。幾度も幾度も心によみがえって、長い一生の間に、絶えない心のともし火となり、導き手となるであろうから。

(京都府医大)

新しい発見をすると、それ以外のものをないがしろにしがちである。新しい考えに視野をさえぎられ、ほかのものは何も見えなくなってしまうからだ。

(東工大)

世代によって大なり小なり言語や動作に相違のあることはいつの世にもあることで、これは驚くにあたらない。しかし、このごろちょっと気になるのは、ときどき世代の違う日本人がほとんど同じ言葉を話していないように思えることだ。

(神戸大)

以上の例は決して難問ではないが、内容が抽象的で、意味よりも原文の語句に引きずられるおそれがある。もちろん抽象的な内容を表現できる語学力も必要であるが、それよりも平易で日常生活に直結した具体的なことから英語に直せることが先決問題であろう。その観点から言えば、下のような例はむしろ好ましい出題になる。

「今、電話にお出になったのは、お母さまですか。」

「いいえ、あれは姉でしたの。声がよく似ているとお思いになりませんか？」

「ええ、そっくりですね。お姉様でしたら、このあいだ送って下さった本のお礼を
申し上げなければなりませんでしたのに。」 (津田境大)

幸い、横浜の郊外にいい下宿が見つかったんですが、大学に通うのに今までの二倍
の時間はかかるでしょう。 (慶大一経)

なお日本文の一部を英訳させる部分訳の形式も多く用いられているが、それ以外の部分が必要な場合と特に必要とは思われない場合とがある。

日本で作られた地図では、その中央に太平洋があり、右がわにアメリカ大陸が、そして左半分には旧大陸が、描かれている。

日本製の世界地図をみることに慣れてしまっている日本の子どもにとって、ニューヨークとパリは、地図の端と端にあたるわけだから、やたらに遠くみえる。しかし、地球はまるいわけで、事実上ニューヨークとパリの距離は、東京とホノルル間の距離よりも短い。まるい地球を一枚の紙の上にのばしてみるということが、そもそも無理な話なのだ。 (東京外大)

これは全文訳に近い問題であるが、前段の説明があるので下線部の叙述がいっそう明白になっている。したがって、部分訳として出題する理由が首肯されるであろう。

泳ぎというものは少年時代に最もふさわしいものである。やればやるほど効果があり、決して後戻りするものではない。初歩訓練を着実に積み重ねていって浮くこと。浮くことができるということは体の上の革命である。(a) 浮くことができると、手足を動かして前に進むようになる。あとは本人の努力次第で進歩していくものである。これほど効果が明確にわかるものはない。プールではカンニングはできない。どこまでも自分で泳がなくてはならない。自分で努力し、がまんをして頑張らなくては成果は得られない。(b) めざす目標に到達した時の感動は何ものにもたとえようのないものである。それは自分を克服した喜び、自分に勝った自信の体得である。 (芝浦工大)

この問題では英訳を求めている部分がわずかで、それ以外が与えられなくても別に困ることはなさそうである。部分訳としてはほかに適当な部分もあるようで、これだけのためにわざわざ長い1節を掲げるまでもないように思われる。

(b) 条件作文

普通の和文英訳では簡単な問題でもいくつか違った解答が考えられるので、一定の条件を設定して正解を一つにしぼる方法が用いられる。英文の一部を空所にして適当な語句を入れさせたり、文の書き出しを指定して解答を完成させたりする形式が多い。

A. この本はあの本の3倍の厚さだ。

This book is three (1) as thick as that.

B. 帰宅してみたら母はテレビを消して居間で静かにすわっていた。

I arrived home to find my mother (2) quietly in the living room with the television (3).

C. このタイプライターはどこか具合が悪い。

(4) is wrong (5) this typewriter. (独協大—外)

(1) 信頼する友にそむかれるほどがっかりすることはない。

Nothing is _____

(2) テレビのおかげで、まるで現地にいるようにオリンピックが見られた。

Thanks _____

(3) 両親のるすの間、年少の彼が弟たちの世話をしなければならなかった。

Young _____

(4) 困ったことに、彼は昔ほど働こうとしない。

The trouble is _____

(5) この本を読めば、フランスの生活がよくわかる。

This book _____

(6) 東西の相互理解増進のために、われわれは大いに努力しなければならない。

Our great efforts _____

(東北大)

上例のうちで、独協大のような問題は正解が一つに限定されるので、客観的に採点できるという長所がある。しかし、語法の知識をテストすることはできても、真の表現力を検出するには不十分であろう。この種の問題はかなり多く出ているが、文法知識のテストと区別がつかないことが少なくない。それに対して、東北大のような問題は書き出しを指定しているだけで、解答はいくつか違うものが考えられる。したがって、英作文の要素が強いことは認められる。けれども指定があるためにそれに合致する表現に思いつかなければ正解を得られないことになる。たとえば、(3)は *Yongng as he was,...* となる解答を期待しているのであろうが、ほかの平易な表現で同じ意味を表わすこともできるはずで、それを禁じる点に疑問が残る。つまり、指定することによって自由な表現力を拘束する結果になる。この種の出題は今後とも多くなるものと予想されるが、特殊語法や *idiom* を知らないとできないようなものは避けるべきであろう。

(c) 自由作文

何か主題を与えて自由に英文を書かせる形式は表現力をみる上では効果があるが、さまざまな解答をどう評価するかという点に大きな困難がある。今年度の出題は少なく、次の2例が目につくだけである。

次のテーマの中ひとつを選び、それについて約10行の英文を作れ。

(1) "Man and Woman"

(2) "Japan in Asia"

(大阪女大)

次の題の一つを選び 50—70 語の英文を作りなさい。

"My Hobby" "Nature" "My High School Life"

(信州大)

いずれも主題に選択の余地があり、長さも示されているので、だれでも何かは書けるに違いない。しかし表現と内容の両面で採点基準をどうするかという点が大きな問題であろう。このような場合には、できれば複数の採点者が比較検討することが望ましい。

なお自由作文の要素を含んだものとして、次のような出題がある。

Dear Mr. Yamada,

My wife and I have returned home to Japan safe and sound after one year's stay in England, and we are going to invite a few close friends of ours to dinner. It will give us great pleasure if you will come to our house on the 12th of this month at four o'clock in the afternoon.

Sincerely yours,

Masao Ogawa

山田君は、友人の小川君から上のような夕食会への招待状を受け取った。しかし、その日は、仕事のためにどうしても都合が悪く、ことわりのはがきを書かなければならない。山田君にかわって、ことわり状を書け。ただし、(1) 招待していただいたことへのお礼、(2) 残念ながら出席できないこと(理由をそえる)、(3) 別の機会に外国のお話を聞きたいこと、(4) 奥様へよろしくとの伝言、をその要旨とする。

(和歌山大)

私の住んでいる村について、外国人に簡単に紹介したいと思います。下記の四つの事項をふくみながら、3~4 行程度の英文をまとめなさい。

- (イ) 位置：大阪の南部で、金剛山のふもと
- (ロ) 人口：約 5,000 人
- (ハ) 産業：大半が農業で工業はほとんどない
- (ニ) 特徴：歴史に名高い古い寺や城が多い

上の 2 例は和文英訳と自由作文をまぜたような出題である。両者とも内容が具体的であり、かなり長い英文でも受験生が学力に応じて書けるはずであり、自由作文と違って内容が限定されているので何を書こうかと迷うこともない。しかも採点基準もかなりはっきり立てられるという長所もある。この種の出題はあまり多くないが、表現力をテストするには適当なもので、もっと多数の大学が考慮を払うことを望みたい。

(3) 文法に関する問題

(a) 派生語と語形変化

長文を材料として総合問題を作る場合に、その中に出ていくつかの単語を取り出して他の品詞形を求める問題が多く出ている。それは問題文とは何も直接の関係がなく、独立した派生語の問題として出せるのが普通である。ただ設問を多くして総合問題らしい体裁を整える効果があるけれども、特に意味が

ないように思われる。派生語の知識を求めるならば、次の例のように context から必然的にきまるような形で出題するほうが適当であろう。

次の各組 (1)～(10) の英文において、(a) の文中の下線を施した単語を適当な品詞に書きかえ、(b) 文中の空所に入れなさい。

1. (a) He is an able man.
(b) He has great 1
2. (a) He arrived late.
(b) His 2 was delayed.
3. (a) I only meet her on occasions.
(b) I only meet her 3.
4. (a) Their conquest of their enemies was complete.
(b) They 4 their enemies completely.
5. (a) I was curious about the reason for his actions.
(b) I felt some 5 about the reason for his actions.
6. (a) These trees grow slowly.
(b) I felt some 5 about the reason for his actions.
7. (a) It is a very important matter.
(b) It is a matter of great 7.
8. (a) They married last year.
(b) Their 8 was last year.
9. (a) We must make our town more modern.
(b) We must 9 our town.
10. (a) He refused me his permission to go out.
(b) He would not 10 me to go out.

(大阪教育大)

また動詞の活用その他の語形変化もよく問題にされるが、次のような例は基本的な動詞を扱っているけれども、出題形式としては簡単すぎるように思われる。

次の各動詞はどのように変形しますか。その活用形 (Conjugation) を全部書き入れなさい。

came, hit, beaten, chose, stood, smile

(専修大一商)

なお conjugation は常識的にはいわゆる three principal parts をきすけれども、厳密には人称・数・時制・法・能を示すすべての語形変化をきすので、come を例にとれば comes や coming もはいることになる。したがって、問題の指示をもっと明確にすることが望ましい。

語形変化を問題にするときに、次の例のように与えられた単語を context に合う形に変える形式にすれば、実際的な運用能力をみることができるわけで、妥当な出題と言えるであろう。

次の 1~5 の文章の () の中に、下の語群よりもっとも適当な語を選び、適切な形に変えて入れなさい。

1. I assume you have decided against (1) a new car.
2. There was a big crowd and it was raining. We had (2) in getting a taxi.
3. I am going by air. It is only a two-hour (3).
4. I don't like rare steaks. I like mine well-(4).
5. I am always (5) when I don't get any mail.

do	wake	disappoint	live	fly	buy	difficult
----	------	------------	------	-----	-----	-----------

(独協大一外)

(b) 空所補充

文の 1 部を空所にして適当な語句を入れさせたり選択させたりする形式は従来から多く用いられている。

次の空所に適当な語を一つ入れよ。

- (1) I think you will be able () get a good mark in the next test.
- (2) A man's worth lies not so much in what he has () in what he is.
- (3) I can do it so () as you give me time.
- (4) He was graduated () his high school in 1971.
- (5) The 20th Olympic Games were () in Munich in 1972.

(大阪商大)

この程度の問題は平易なので普通の学力で解けるはずである。

次の英文には 1 か所ずつ空所がある。指示に従って正しい語を記入しなさい。

1. She is older than I () two years. (前置詞)
2. I () think that he is a good speaker. (副詞)
3. The English () a lot of tea. (動詞)
4. He is () himself with anger. (前置詞)
5. I tried hard to make myself (). (動詞)

この問題には品詞の指定があるので一応考えやすくなっている。しかし、(1) と (4) の前置詞は別として、そのほかは正解が一つとは限るまい。(2) の副詞は **really** のほかにも用いられるものがあるだろう。(3) は **take, have, drink** などが考えられる。(5) は **understood** を予想しているのかも知れないが、前後関係が何もないのではかの動詞でも意味が通じる。何を正しい語とするかが問題で、採点の際に許容範囲を広くしなければならないだろう。

a~c の () 内に入る共通の語が一つだけある。その語を解答欄に記入しなさい。

1. a. It is a very nice hat, except () it doesn't fit me.
b. George only wished he dared look at Maggie, and () she would look at him.

- c. Does he want to have () many children?
2. a. () all his learning, he is a mean man.
b. Jim wasn't () staying home when all of his friends were going to swim.
c. I cleared my throat () my speech.
3. a. Jane stored () little she could save and sent it to her son.
b. I brought with me a bottle opener, a knife, a magnifying glass, and () I thought would be useful.
c. Air is to us () water is to fish.
4. a. When hungry, () he often was, the detective became acutely irritable.
b. I'm getting gray and wrinkled, () is not particularly cheering.
c. Moreover, () you will hardly credit, he was not there himself.
5. a. His wife clung to him () all his faults.
b. The park was very beautiful () all the trees coming out.
c. Who was that you were () this morning?

(小樽商大)

上の問題は一つの文だけでは正解がいくつか出るような場合に、ほかの文と考え合わせて決まる点に長所がある。しかし、ある文だけで解答がはっきりしてしまうと、ほかを見なくてもすむという欠点も考える必要がある。したがって、問題文の出し方を工夫しなければなるまい。

(c) 文の書き換え

複文を単文に書き換えさせたり、話法や態の転換を求めたりする問題は運用能力をためす点から見れば適当な形式であろう。しかし、解答が文法的には可能であっても、実際には不自然な表現になるような場合は避けるべきである。機械的な転換がことばの遊戯に終わるような結果になっては困る。今年度の問題には特に不自然なものは見当たらないようである。

(a) と (b) の文意がほぼ等しくなるように、(b) の書き出しに続けて英文を完成せよ。

1. (a) Classical music is very interesting to me.
(b) I _____
2. (a) It is better for you not to talk so loud.
(b) You _____
3. (a) I have never known such a clever man as he.
(b) He is _____
4. (a) I am sorry I did not follow the doctor's advice.
(b) I wish _____
5. (a) He makes mistakes every time he writes a letter.
(b) He cannot write _____

(三重大)

この問題はよく用いられる型で、正解が必ずしも一つとは限らないものも含まれているが、その点を考慮に入れた出題とすれば難点は認められない。

次の各組の上下の文が、ほぼ同じ意味になるように、各空所に1語を補え。

- A { I never sing this song without recalling my good old days.
This song always 1 me 2 of my good old days.
- B { I could have caught the train if there had not been the accident.
I 1 the train 2 3 the accident.
- C { He was kind enough to show me his cherished pictures.
It 1 2 3 4 to show me his cherished pictures.
- D { It is said that he was the richest man in the village.
He 1 2 3 4 5 the richest man in the village.
- E { He is the best speaker of English in our class.
No 1 2 in our class speaks English 3 4 5 does.

(東北大)

上の問題は空所の数を示してあるので、解答が限定される。ただし、Bの(2)、(3)は because of でも owing to でもよいだろう。またEの(2)は boy, student, person などがはいる。その点さえ認めれば書き換えの問題としては標準に近いものであろう。

下にあげた(1)から(3)までの直接話法の文を間接話法の形に書きかえて、次の文中の空所(1)~(3)を補充せよ。

Some time ago I applied for the post of private secretary to the manager of a building company, and last Thursday I went for an interview. When I was shown into the manager's office he smiled and told me (1) and asked me (2). I told him that I smoked occasionally. Then he asked me (3) and I told him that I spent five years with an architect.

(1) "Sit down."

(2) "Do you smoke?"

(3) "Where have you worked before?"

(阪大)

これは話法の転換を求めているが、ばらばらの文ではなく、ある context の中で取り上げている点に特色があり、文法知識を実際に応用する見地から見て好ましい例と言える。

(d) 誤文訂正

文法的な誤りを訂正させる問題も従来からよく用いられる形式であるが、いろいろな解答が出ないように工夫する必要がある。

つぎの英文中の誤りを訂正して、全文を書きなおしなさい。

(例) Tell me where is he.

(解答) Tell me where he is.

- (1) When have you done it?
- (2) I suggested your friend to be more careful.
- (3) I appreciate to be treated so well.
- (4) The hero was falsely accused to have killed someone.
- (5) It was careless that you agreed to the proposal.

(神戸市外大)

この問題は最も普通の形式で、求められている解答は一とおりであろうが、訂正のし方によっては違った答も出る可能性がある。誤りの部分を示すとか、正しい文と並べて選択させるとか、何か出題形式を変えるほうが解答にまぎれが生じないであろう。

次の文の中には、慣用的に正しい英文が5つある。その番号を番号順に書け。

1. Lend me a knife to cut this string.
2. School begins from half past eight.
3. He was elected president of the society.
4. I asked him for the book, but he did not give me.
5. On my way home, they robbed me of my purse.
6. My another hobby is stamp collecting.
7. Tomorrow is Sunday.
8. He is ill in bed since a week ago.
9. I think your watch will be in somewhere of your room.
10. When did you start Tokyo?
11. Are you difficult to write English?
12. This is the house I used to live in.
13. Wait here till I shall come back.

(鳥取大)

これは誤文訂正ではなく、誤文発見の問題である。正解は明白で機械的に採点できる利点があるが、どこに誤りがあるかよくわからないままに解答が出るおそれがあるのはやむを得ないだろう。

次の各文に、例にならってそれぞれ1語を補い、正しい文にしろ。

〔解答例〕 Do you have ^{any} money with you?

Λ

- (1) Few people live to be hundred years old.
- (2) Please explain me what this word means.
- (3) Can that book be ordered now and paid on delivery?
- (4) After supper I went on my reading.
- (5) How older is your brother than you?
- (6) Old people are taken good care in those countries.

(早大一法)

この問題は1語を補って完全な文に直すという点に新味があり、正確な語法上の知識をためることができる。解答にまぎれがない点から言って工夫された

出題と言えるだろう。

(4) 発音に関する問題

(a) 単語の発音とつづり字

そもそも音声に関することを文字で答えるには限界があり、無理が生じることとは明らかである。実際問題としては、英語の音を正しく口にしたり聞き分けることが肝要であって、発音記号やアクセントの位置を覚えてだけで発音が上達するわけではない。多くの大学が paper test だけに頼っている現状が打開されないかぎり、一般の受験生は発音記号などに関する知識があっても実際の発音をまちがえるという奇妙な現象が続くであろう。その点については、今年度も残念ながら大きな進歩は見られなかった。現実の paper test では文章の発音を扱いにくいので、どうしても単語の発音が主体になる。しかも発音とつづり字の複雑な関係を取り上げることが多くなり、毎年同じような単語が問題にされている。また発音の面で問題となるものを求めると、とにかく frequency が低い単語を扱うことになりやすい。英語の運用面から考えると、どちらかと言えば瑣末的な点をつつつく弊害も生じる。なお時には発音関係も軽視してはいないことを表わすために、申し訳の程度で出題しているような例も見られる。

下の15組の単語の中で、下線を施した部分の発音が同じものが5組ある。その組の番号を若い番号順に解答欄に記入しなさい。

- | | | | |
|-------------------|----------------|--------------------|-------------------|
| 1. <u>cost</u> | <u>coat</u> | 2. <u>coat</u> | <u>boat</u> |
| 3. <u>country</u> | <u>count</u> | 4. <u>hood</u> | <u>mood</u> |
| 5. <u>earths</u> | <u>growths</u> | 6. <u>heart</u> | <u>heard</u> |
| 7. <u>blow</u> | <u>plow</u> | 8. <u>tomb</u> | <u>comb</u> |
| 9. <u>ocean</u> | <u>gold</u> | 10. <u>exhibit</u> | <u>exhibition</u> |
| 11. <u>image</u> | <u>damage</u> | 12. <u>guitar</u> | <u>cigar</u> |
| 13. <u>height</u> | <u>weight</u> | 14. <u>south</u> | <u>southern</u> |
| 15. <u>crow</u> | <u>brow</u> | | |

(青山学院大一理工)

この種の問題は類例が多く、同じ単語が何度もくり返して出題されている。基本的な単語を取り上げている点は認められるが、(5)の earth は [ə:θs] も [ə:ðz] もあるはずで、またこの複数形は頻度も低く、とくに発音上重要とは言えないであろう。

つぎのイ.～ヌ.の各組とも、各語の最後の空所に、下の枠内に示されている文字を入れると、各組の2語は下線部の母音の発音が同じになる。例にならって、それぞれの空所に適当な文字の番号を書き入れなさい。ただし同一の文字を2度以上使ってもよい。なお、'gh' は1字とみなす。例: se8—soa6

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| イ. ai□—grea□ | ロ. allo□—stou□ | ハ. mu□—rou□ |
| ニ. che□—grou□ | ホ. com□—sou□ | ヘ. cre□—sou□ |

- ト. endo□—fou□ チ. kin□—si□ リ. sal□—shaw□
 ヌ. so□—floo□
 (1) b (2) d (3) gh (4) l (5) n (6) p (7) t (8) w

(慶大一商)

この問題は母音とつづり字の複雑な関係をねらったもので、手のこんだ形式である。(イ)は aid でも ail でも正解としなければなるまいが、その他は答が 1 種に限られている。しかし、クイズ的なおもしろさがあるけれども、ことばの遊戯のような感じもする。

異なった語で、アクセントのある母音字以下全音が一致し、その母音の前の子音字が異なっている、ときこれらの語は脚韻をふむという(例: star—spar; maiden—laden; tenderly—slenderly)。次の各 2 行の文の行末はこの脚韻をふんでいる。第 2 行の下線の単語のスペリングは誤っている。正しいものを書きなさい。

- (1) I say it's black, you say it's white;
I wonder which of us is write.
- (2) Put this paper on the fire,
Then the smoke will go up hire.
- (3) Listen, boys, and you will hear
The barking of the forest dear.
- (4) Do you think that you would rather
Sit down here or go on father?
- (5) No wonder that the boy is pale!
I saw him touch the lion's tale.
- (6) The gates are shut, but still a few
More children ask to be let threw.
- (7) The sick boy seemed too tired to speak;
His illness made him very week.
- (8) If a tiger came too near,
I should run away from hear.
- (9) The schoolboys, when the game is done,
Are glad to know their team has one.
- (10) The beggar asked if I could spare
A shilling for his railway fair.

(慶大一工)

上の問題も苦心して作成されたものであろう。指示の中に rhyme の説明があるけれども、要するに同音異義語を扱った問題である。

次の文中の下線部には、そこに入るべき語が発音記号で示されている。その語を解答欄に記入せよ。

- 1) Many great Englishmen are berid in Westminster Abbey.
- 2) She finds fɔ:lt with everything he does.
- 3) blɒd is thicker than water.
- 4) He injured the mʌslz of his arm.
- 5) led is often mixed with other metals.

(東京水産大)

発音表記にはいくつかの方法があるので、発音記号を出すことには多少の疑問がある。上の問題はわかりやすい部類に属するけれども、記号を用いる以上は [berid] と [maslz] には stress の記号をつけるべきである。

(b) 単語のアクセント

単語のアクセントも発音上は重要な事項であるが、母音の場合と同様にまぎれないものを選び、英米の相違にも留意して出題する必要がある。

次の単語の中には、最も強いアクセントが第2音節にあるものが五つある。その番号を番号順に書け。

- | | | |
|---------------|---------------|--------------|
| 1. Italy | 2. lemon | 3. mischief |
| 4. philosophy | 5. differ | 6. elevator |
| 7. develop | 8. momentary | 9. biography |
| 10. accuracy | 11. spiritual | 12. Africa |
| 13. opposite | 14. official | 15. manager |
| 16. average | 17. effort | 18. Catholic |
| 19. secondary | 20. career | |

(鳥取大)

アクセント問題としては最も普通の形で、取り上げている単語もだいたい妥当である。しかし、syllabication の知識を求める必要はないので、音節に切って示すほうが親切であろう。

下の 1~5 の組の中には、二語とも第2音節にアクセントのおかれるものが一組ある。その組の番号をしるせ。

- | | | |
|-------------------------|-----------------------------|------------------------|
| 1 (cultivate
pattern | 2 (excess
thermometer | 3 (injury
machinery |
| 4 (innocent
lunatic | 5 (instrument
particular | |

(東大—1次・理)

この問題も音節を前提としている点は上と同じである。正解は(2)のはずであるが、excess は excess baggage のように形容詞として用いる場合には第1音節に stress が置かれることがあるので、適当とは言えない。

次の単語のうち第1音節に主アクセントのあるものを5つ選び、その記号を○でかこめ。

- | | | |
|--------------|--------------|-------------|
| イ. intricate | ロ. pursue | ハ. preface |
| ニ. prefer | ホ. revenge | ヘ. apparent |
| ト. heroin | チ. opponent | リ. mischief |
| ヌ. overtake | ル. absurd | ヲ. hygiene |
| ワ. museum | カ. apparatus | ヨ. humane |

(関西学院大一経)

この問題には5つという指定があるけれども、overtake と museum は第1音節にアクセントがある場合も考えられるので、それを選んだ者をどう扱うかが問題になる。

(c) イントネーション

単語の発音だけでなく、文の発音とくにイントネーションを取り上げる意図は結構である。しかし、表記の方法も一定していないので、paper test であろうしても困難を伴うのはやむを得ない。

次の対話内の〔 〕の中よりもっとも適切なイントネーション（抑揚）で言われている文の一つを選び、解答欄に記入しなさい。

1. Mr. A: Have you ordered our dinner?

Mr. B: {
A. Yes, and I also ordered dessert.
B. Yes, and I also ordered dessert.
C. Yes, and I also ordered dessert.
D. Yes, and I also ordered dessert.

2. Mr. A: Where do you live?

Mr. B: I live in Tokyo. {
A. Where do you live?
B. Where do you live?
C. Where do you live?
D. Where do you live?

(独協大一外)

イントネーションを扱った問題としては比較的に無難なものであろう。多少の疑点はあるにしても、常識的に解答は一つに限定してさしつかえあるまい。

次の対話の下線の部分のイントネーションは、ふつう下の a~e のどの型に属するか。それぞれ記号 (a, b, c, d, e) で答えよ。

°. Is he young or old? —He is young. (答) b.

1. My name is Dick Brown. What's your name?

—John Smith is mine.

2. Are the girls pretty? —Yes, they are pretty.

3. You don't look happy. —Sure, I am.

4. I am happy. —So am I.

5. Here's something for you. —Oh, what is it?

a. Shut your book. b. It's a desk.

c. Does she sing? d. I like it.

e. Look at me.

(金沢大)

この問題はかなり疑問の余地があり、受験生にはむずかしいと思われる。たとえば、(4)は a, b, e のどの型に属すると考えるべきか、(5)は c と d のど

ちらが正しいか、場合により人によって違うかも知れない。イントネーションは *native speakers* でも迷う場合が少なくないので、入試問題に取り上げる際には基本的なものに限るべきであろう。なお文の発音については *sentence stress* や *breath group* も問題になるはずだが、それを扱ったものはきわめて少数である。

(5) 全 般 的 傾 向

(a) 出題の形式

例年に比べて今年度の出題で目につく点は、客観テストが増加したことである。たとえば、上智大(外)、上智大(理工)、慶大(法)、立大(文)、日大(法)、早大(商)、早大(理工)、独協大(外)などは全面的に客観テストを採用し、その中で上智大、慶大、立大などは答案処理にコンピュータを利用している。また国立大の場合には、これまで主として第1次テストを施行する大学で客観テストを用いていたが、今年は千葉大が全部の問題をこの方法で出している。なお大部分の出題を客観テストに依存している大学には、東京教育大、学習院大(法)、拓殖大(商)、名古屋工大、愛知大(法経)、同志社大(工)、同志社大(文)そのほか多数がある。

客観テストが増大した結果として、英文や日本語による記述式の問題が少なくなり、したがって解答量も昨年より減少している。主観に左右されないで公平な採点ができるという見地から言えば、客観テストが多くなったことは歓迎されるであろう。しかし、解答が記号や番号で出る場合には、目をつぶって書いた答が正解になることもあり、偶然性に支配される率が高くなる。それを避けるためには、問題量を多くしたり、選択枝をふやしたり、単語のつづりを求めたりするなどの工夫が必要であろう。二者択一のような問題を少し出ただけでは真の学力は判定できない。上智大(外)の場合には、12 題で 96 個の解答を求め、内容も読解、作文、文法の文野にわたっているので、客観テストとしてはよく考慮された出題と言える。ほかの多数の例の中にはかなり安易な考えから出たと思われるような出題も見受けられる。答案処理が簡単ですむという便宜的立場が主になっているとすれば、反省しなければならぬまい。

客観テストだけでは密度が高い読解力や作文力を検出することは困難なので、採点が多少は主観的になる欠陥はあるとしても、記述テストを無視することはできない。両者にはそれぞれ長所と短所があるので、適当に併用することが望ましい。実際に大部分の大学ではその方法を探っているようである。英文や日本語による記述式解答を求めるときには、あらかじめ解答を予想して許容

範囲を明確にして、できるだけ客観的な採点基準を立てる必要がある。なお記述テストに用いられる出題形式はこれまでにみつけた観があり、今年度も文法や発音に関する問題で新型と見られるものが僅かあっただけである。新工夫をこらすことは結構であるが、あまりひねった形式で受験生を迷わすような出題は避けるべきであろう。学力テストの本質から離れたクイズまがいの出題はおもしろいだけで、あまり意味がないことになる。

(b) 出題の内容

内容的に見ると今年も例年と大差がないように思われる。読解力問題が依然として最も多く、4割以上を占めている。材料として用いられている英文はさまざまであるが、中には多少程度が高いものも見受けられる。長さも1,000語を越すものはまれで、400語くらいが標準のようである。長くても表現や内容が平易ならばさしつかえないはずであるが、限られた時間を考えれば極端な長文は出題しにくいからであろう。なお従来何回も出題された英文がまた出ている例もある。良い材料であるが故にくり返して出題されるとも言えるが、あまりに見慣れたものは避けるほうがよい。読解力をテストするために、単なる和訳ではなく各種のきめのこまかい設問が多くなっている点は認められる。

読解力に次いで作文力に関する問題が約2割出ているが、その多くは受験生の学力を考慮したためか、基礎的な平易なものである。なお表現力に関する問題をまったく除いている大学が少数あるが、なるべく多角的に学力を測定する見地から言えば何か考慮が足りないように思われる。文法問題は昨年とだいたい同様で、形式も内容も大きく変わっていない。運用度が低い単なる文法知識をためすような問題は少なくなっているようである。話し方や聞き方に関する問題は昨年より僅かながらふえているようだが、この方面の学力を paper test で判定することには限界がある。今年も hearing や dictation を課している大学は少数である。実施の上で多少の困難や障害があることはわかるけれども、機械化が進んだ現在ではもっと多数の大学が積極的に考慮を払うことを望みたい。それは入試のためだけではなく、高校の英語教育にも良い影響を及ぼすはずである。

学力検査はできるだけ多角的に実施することが望ましい。1問だけで各方面の学力をみることも不可能ではないが、複数にするほうが概して適当であろう。問題量と検査時間は大学によってまちまちであるが、どの程度が適当かは大学の自主的判断によることである。現状では時間は90分くらいが標準型のようで、東京外大、大阪大、名古屋工大、京都府医大、京大などでは150分としているが、それくらいが限界であろう。問題量が少ないのに多くの時間を与えた

り、逆に大量の問題を消化するのに無理と思われるほどの時間しか与えないのは考えものである。受験生の学力をよく考慮した上でバランスのとれた出題を望みたい。なお各問題の配点を公表している大学はまだ少ないが、とくに支障がなければ示すほうが親切であろう。全般的に見て各大学が入試問題に慎重な考慮を払っている点は認められるし、従来に比べればかなり改善されたと言えるだろう。しかし、現状で満足することはできない。すべての大学教官は研究と同時に教育につくす責任があり、入試に関係する人たちのいっそうの努力と工夫を切望しなければならない。